に体流しの稽古に移るので、それより止流し、内用流しと次第に前のごとく繰り返して練習するのであります。されば此れより横鱗の花と其用流しを習へば、卽ち葉蘭一通りの稽古を修了するので。進んでは裏葉の体の三才、同じく用流し、体受流し、止流し、内用流し、横鱗變化の曲。尙進めば眞向の体に同じく止流し、裏葉の体の用流し變化の曲、体添流し變化の曲、体流し變化の曲、と云ふやうに漸次に進むが定例であります。

遮莫、挿花の正体と云へば既述のごとく表葉、裏葉、眞向の三体でありまして、用流し、止流しなどの曲は三体のいづれにもこれ有りと雖も元より花体は一にして、流しの枝の遣ひ方に大差はありませぬ。故に花形の骨法を說きたる例に倣ふて先づ三体の活け方を述べ、それより一括して曲花の活け方を申し述べることゝ致します。

二　表葉の挿方

第三十三圖は卽ち表葉の体五枚挿し方の順序を示したるもので、陽の花則ち客位の組方であります。先づ第一に用の葉を入れ次に用添を用に重ねて整は手前に入れるので、用の葉は繪に見るごとく眞横にせず、肩を指すやう少し前へ出すのであります。夫より体受を日表を見せて葉柄を向ふに入れるので、此の時丁度三本にて葉柄が三角となります、その二

第三十三圖

本相並んだる間に体の葉を入れるので、止は最後に手前の隅に之も少し前に振り出して挿すのであります。

扨又主位七枚の組方は第三十四圖のごとく、始めは矢張り用と用添を入れ次に体受より低く日表を見せて界葉を入れ、これと脊合せに少しく高く日裏を出して体受を入れ夫より体の葉を入れるので、体の葉柄は向ふ隅に挿すのであります。斯の樣に体に葉三枚を入れるときは体、体受、界葉をもつて又三才を象るので、眞直に三枚重なればよろしいけれども、然もなければ体受は向ふに、界葉は手前に喰ひ違ふ樣にし、体と体受と界葉との葉先の間隔は上程長く、約そ四分六分の割合ひにするのであります。止は前同樣手前隅に入れ、別に又小さい葉を体の眞下に、止より内に並べて入れるので、これを後止と云

第三十四圖

ひます。

九枚客位の入れ方は第三十五圖のごとく、これも用と用添を入れ、次に用に重ねて卷葉を入れるので、葉柄は向ふに挿すのであります。次に眞中に界葉を入れ、手前に体受を、又向ふに体を入れるので、夫より先づ止添を手前隅に入れ、次に止を入れて接合せしめ、次に後止を挿すのであります。圖は界葉に枯葉を遣ふてありますが、勿論枯葉に限る譯ではなく、又必ず卷葉を入れるに定まるのでもありませぬ。即ち此等のことは前項に述べたる通りであります。(以下倣之)

第三十五圖

第三十六圖

十一枚主位の入方は第三十六圖のごとく、用の控へと体添の葉を増すので、用の控へは用と用添を入れたる次に挿し、体添はそれより巻葉を入れ界葉を入れ、体受、体を入れたる次に挿すのであります。而して控へは少しく向ふに振りたるがよろしく、体添は手前に出すやうに遣ふので、止の入方は少しも更りありませぬ。

第三十七圖

十三枚客位は、第三十七圖のごとく用添と止の控を増して入れるので、用添は都合二枚となります。始め用を入れ、次に第一第二と用添を入れるので、葉先の間隔は四と六の割合ひにするのであります。それよりの次第は以前のごとく、体を入れ終つて止を挿すので、止の控は本止の次、後止より前に入れ。葉先は向ふへはずして置くのであります。

十五枚主位は第三十八圖のごとく、抱へ葉と止の界葉を増して入れるので、抱へ葉は体及び体添の後ろより、向ふ縁を巻き抱へるやうに入れ、止の界葉は止を入れ終り門留をしてより、日表を出して止と用添の間に少しく斜に、葉柄は後止と控の間に挿すのであります。尤も葉は丸形の極く小さなのがよろしい。

第三十八圖

十七枚では体に二枚増すので、一枚は抱葉を界葉の所へ矢張り後ろより入れて手前の縁を巻くごとくに入れ、今一枚は体添を低く入れるので、恰かも後止の上に位し、上の体添よりは稍小さい葉を用ひるのであります。

扨以上述べましたる葉は各々役葉と云ひて枝葉の配置の大概でありまして、此上葉數を増すには体受、体添或は用の控、用添又は止の控、止添など、三才の強弱を見計ふて何程にても挿せばよろしいので、これらの中にて或は日裏を

出し、日表を見せ、次第に反覆して株をも増すのであります。

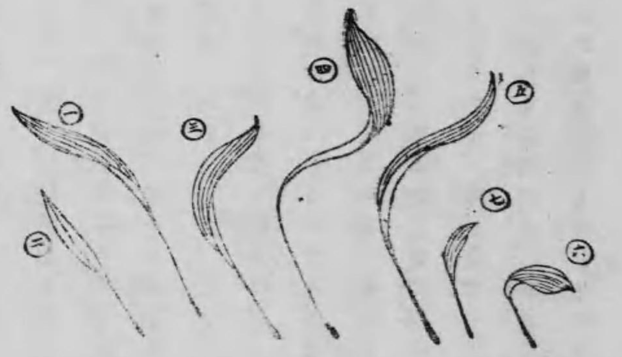
尙以上述べましたるところは只凡例に過ぎず、葉數に依つて何枚のときは此れこれの葉を挿し、何枚となれば何々の葉を増すと定まる譯でもなければ、何枚にては体に何枚用に何枚止に何枚と限るのでもありませぬ。三才のいづれか葉性弱きときは、數を増して勢ひをつけ、葉と葉の間に莖を露出して聯絡を絶つときは、又葉を増し入れて緣をつなぐなど、その外臨機應變の處置をなすべく、多少挿し方の順序變動するとも、又決して差し支へはありませぬ。

されば初心の人は、先づ如上の方寸に依つて稽古するがよろしいので、入れ方の難易その他すべてを考慮して、右の次第に序列したのであります。

三　裏葉の挿方

裏葉の体の拵へ方は第三十九圖(四)のごとく、先づその中央を表葉の体とは反對に日表の向きに矯めて彎曲となし、更らに葉先より凡そ葉の中程まで日裏の方へ卷き、充分に餅をつけて矯め返すので、葉先を稍後ろへ傾けて、日表を正

第三十九圖(一)

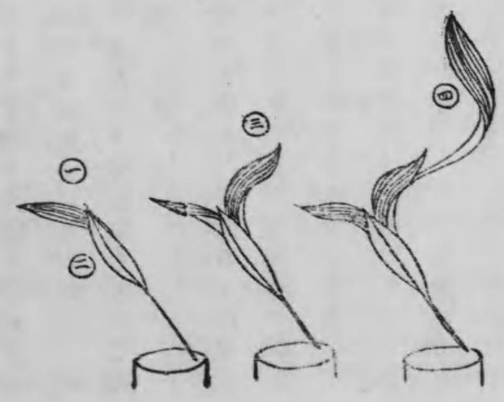


面に向けるのであります。そして体受(五)も葉先を上に向はせ、体によく添はせるには葉先より日表に少しく卷いて矯めるがよろしい。挿し方の順序は始め用を入れて、次に用添を入れ、夫れより体添(三)を入れて次に体を入れ、次に体受を入れて止を入れ、最後に後止を入れるので、表葉の入れ方と全然相違はありませぬ。故に茲には一例を示すにとゞめて管々しくは申でませぬ。

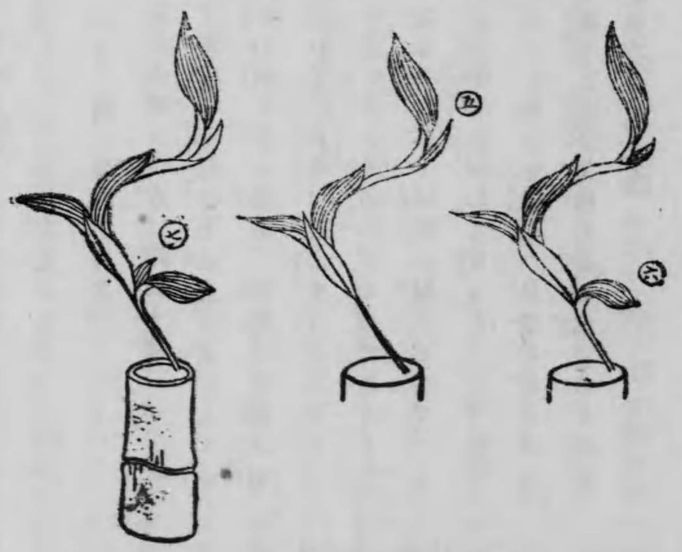
さりながら、体の方の葉の遣ひかたは悉皆反對となるので、すべて葉條の廣い方を手前に出すのであります。これは何故かと云へば、則はち体に屬する葉は一切体に隨ふて向きを更へた譯なので、言ひ換

へれば、表葉の体の葉を全部一時に、一轉せしめたる風に入れるが裏葉の法で自然葉條の廣い方が前に出ることゝなるのであります。隨つて役葉の名稱も顚倒して、表葉の花の体受の位置にある葉を裏葉の花にては体添と云ひ、同じく体添の位置にある葉を体受と唱へるので、總じて葉蘭は日表に向ふたる葉を受、控と呼び、日裏の方なる葉を添と名づけるのであります。これに依つて曲花にても表葉の体と裏葉の体とにて、体流し、体添流しが反對の方向に出ることゝなるので、同じ花形にてありながら葉蘭を活ける場合には、表葉のときは体流しと云ひ、裏葉のときには体受流しといふが如き相違も生じるのであります。

第三十九圖（二）



第三十九圖（三）



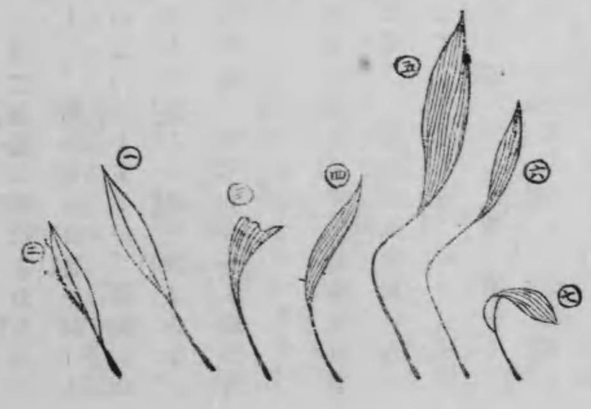
さて裏葉の体はその名のごとく、用の方へ日裏を向けるのでありまするが、裏葉なればとて全く日表を顯はさないのでは、陰陽和合の法則に背き、三才が相應いたしませぬ。ゆゑに体の葉の手前縁を日裏に卷き、葉先を充分矯め返へして、体用止各々互ひに向ひ合ふ樣にするので、罷むなく体の葉先は稍向ふに傾く形となります。隨つて格先を水際に戻して垂直となるやうにす

るには、矯め返したる葉の中程、即ち体受の邊りを前に振り出すので、体添はたとへ幾枚入るとも、眞直ぐに用と對ひ合つてゐればよろしいのであります。

四　眞向の挿方

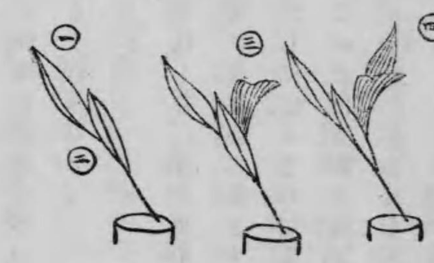
眞向の体の拵らへ方は第四十圖に示すがごとく、葉柄の中央部を日裏を下にして稍斜に葉條の狹い方へ矯め、又更らに其上部葉際に於いて、此度は日表を下にして少しく葉條の廣い方へ矯めつけるのであります。体受の葉もまた体と同樣に矯めるので、その外の葉は從前と少しも更りありませぬ。而してこれに用ひる体及び体受の葉は小さくして細形の隨分葉柄の長い太いのが適ひよきものであります。

第四十圖（一）



挿し方の順序は裏葉の花と全然同じ事でありますから再び茲に贅しませぬ。唯注意すべきは体の葉を眞直に立てることで、日表を正面に所謂眞向にするのであります。單に体而已ならず体受、体添も共に体の左右に並び立つて眞向に成るやうにするのであります。体受は少しく用の方へ向けるがよろしく、用は他の花よりも一層葉先を前に振り出して置かねばなりませぬ。そして体、体受、体添を以つて又三才を象るので、其葉先の間隔は上程長く四分六分の割合ひとし、葉と葉の間は付かず離れず、同じ程に僅かに間隙を明けて置くのであります。又此の体の花に限り、葉際の葉柄を見せてもよろしい。されば肉眼には緣が斷れますけれども所謂心眼の通ずるところに依つて緣を接ぎ、手練の程を露はすので、これ又虛實の方便であります。然は去り乍ら禮席

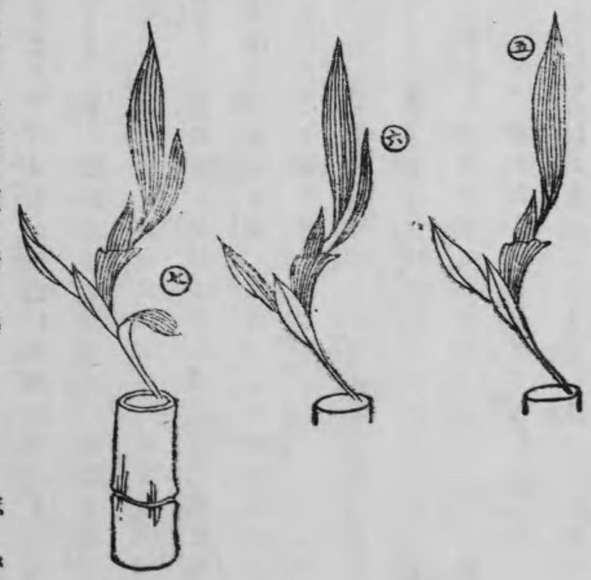
第四十圖（二）



などには面白からず、兎角緣を接ぐに限るので。左樣なときには体添を前面に入れて葉柄を覆くすか、或は又体受、体添を裏葉の体のときのごとくに入れてもよいのであります。

そは何れとも、体、体受及び添の葉は皆葉條の廣き方を用の側にして遣ふものであります。これまた裏葉の体と同じ理法に依ることでありまして、裏葉のごとくに全く廻りきらず、云はゞ半廻りとなりたる譯でありますから、用の反對の方向を葉條の狹き方と定めるので、体の葉

第四十圖（三）



條の狹き方の葉を体受とし廣き方の葉は体添となるのであります。

眞向の体の花には、体の抱葉などの入れ方はないので、葉數多く挿すときは、体添及び用、止に增して入れるのであります。尙此の体の曲としては止流しがあるばかりで、体流しも体添流しも、至自用流しも內用流しもありません。表葉の体にして格に入り、裏葉の体をもつて絢爛の極とすれば眞向の体は平淡に達したるもので、その容姿おのづから氣品高く、誠に高尙閑雅なる花であります。

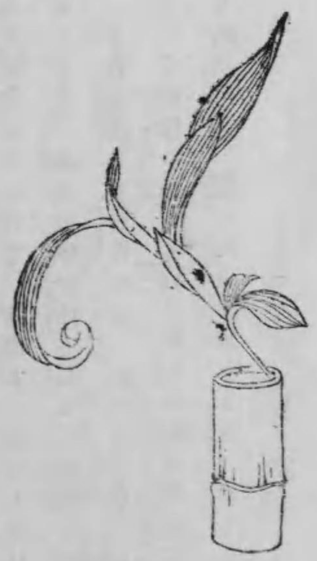
五　曲花の挿方

總じて曲花は、三体何れも用の格先を上に向はせ、成る丈け体に添はせて入れるので、用の丈けは正体の花よりは短かくなります。而して三才の花矩は、矢張り確と守らねばならぬので、正体より稍花を倒して、体は十分に矯めなければなりませぬ。止も稍小さな葉を用ひるがよろしいので、水際の高さは常例のごとくであります。入れ方は別に更りもありませぬが、姿は甚だしく變化致

しますゆゑに、一寸格好の取り悪いものであります。五枚七枚の花では流しの葉は一枚入れるので、九枚十一枚にては二枚、十三枚十五枚にては三枚で、十七枚十九枚にては四枚五枚も入れ、夫より葉數多くなる程流しの葉も増して入れるのであります。

◎◎◎用流しの花は第四十一圖の如く用及び用添の葉を入れて次に流しの葉を入れるので、それよりの手續きは從前の通りであります。或は又葉數多く挿すときは第四十二圖のごとく、用の葉の下より流してもよろしいので、これは用添を最始に入れて、次に流しの葉を入れ、それより用を入れるのであります。二枚三枚も流すときは、始め長い葉より順々短い

第四十一圖



第四十二圖

れて次の葉先迄が二寸なれば、夫より次の葉先迄は三四寸、又次は五六寸、一尺と、先きに至る程次第に長くするのであります。すべて用流しの入れ方は表葉も裏葉も同樣でありまして、流しの長さに制限はなく、其葉先を向ふへ流すとも、又内に曲げるとも、それ

第四十三圖

葉を重ねて行くので、少しの隙間も明かぬやう、工合よく矯め合せなければなりません。流しの葉の間隔は、体と体受又は用と用添に於ける間隔と同樣で、譬へば用の葉から分

第四十四圖

ります。二枚以上流すときは用流しとは反對に短かき葉より漸次に長き葉を入れるので、その外のことはすべて用流し同樣であります。(但し第四十六圖のごとく流しの添を入れるときは、添は後より入れるのであります)。体流しの花に特に注意すべきことは流しの葉先の位置で、体に隨つて其儘うは隨意であります。

第四十五圖

体流しの入方は第四十四圖のごとく、用及び用添を入れて次に体を入れ、夫より流しを入れるので、これ五枚の挿し方であ

第四十六圖

添流しと名稱は異りますけれども實は些細なる差違に止まり、体に多く添ふて出でたるを体流しと云ひ、(第四十四圖)稍低く体添のところより出でたるを体添流し(第四十五圖)といしろへ流れては格好も惡しく、第一床の掛物に差支へますゆゑ、横に出さなければならぬので、これが誠に至難なる點であります。体流し、体ふので、花形に大差もなく、入れ方は全然同じことでありますけれども、裏葉の体の場合には之を体受流しと唱へることは、度々申述べましたる通りで

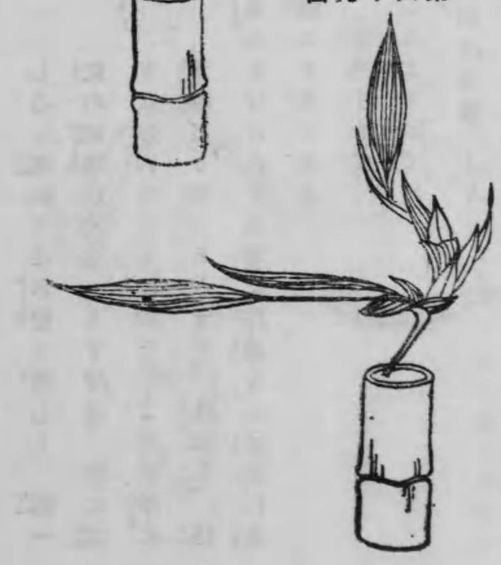
第四十七圖

あります。（第四十六圖）

止流しは体・用・止を入れて最後に流しの葉を入れるので、主位七枚の入方は第四十七圖のごとくであります。或ひは流しは第四十八圖のごとく、止の葉より上に入れてもよろしく、二枚三枚も流すときは重ねて入れても、又第四十九圖のごとく並べて入れてもよいのであります。これも体流しの如く眞横に流すので、屈曲の有無に拘はらず、其格先は元の矯めたるところと水平

第四十八圖

第四十九圖



にしなければなりませぬ。尙流し二枚入れたるときは本止と共に三才にとり、葉先の間隔は從前のごとくであります。

内用流しは先づ前留を入れ、夫より用、用添、体受、体など葉を挿すのであります。而して前止は用より少し前に振つて水平にするので、内用は眞横に流しその格先は用の格先と水平にするのであります。表葉の体、裏葉の体の内用流しの格好は第五十圖並に第五十一圖のごとく、前止及び流しに葉數多く入れるときは、すべて從前の止や、流し

第五十圖

第五十一圖

に準ずればよいのであります。

用流變化の曲、体添流變化の曲、体流變化の曲、是等は皆用流しの入れ方と同様でありまして、第五十二圖第五十三圖第五十四圖第五十五圖のごとく、流しの出るところが高いと低いとの差違があるばかりであります。尤も体添流しは境葉の次に入れ体流しは体添を入れ終つてより体より先きに入れるので、いづれも流しを前に振り出して用の

第五十二圖

第五十四圖

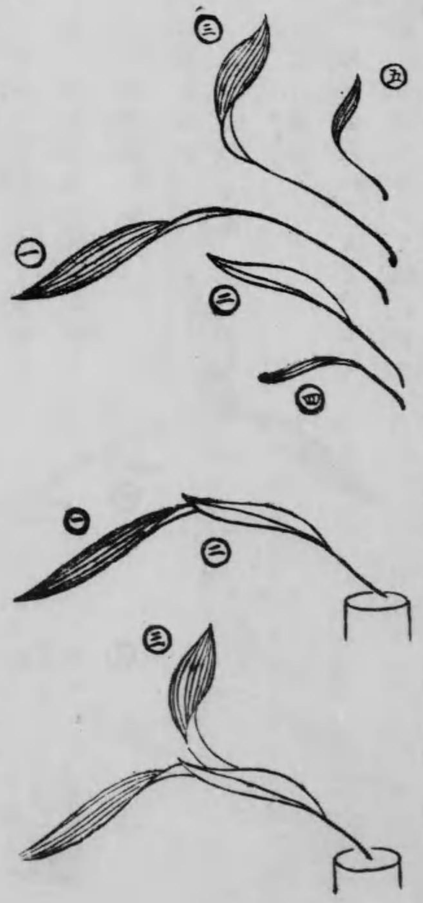
第五十三圖

上になる樣に挿すのであります。これは莖を二箇所反對に矯めなければなりませぬので、矯め方に餘程熟練を要すると共に、葉先が左右に振つて止まりがたく、巧者と雖も容易くは活からぬ花であります。

六　横鱗の挿方

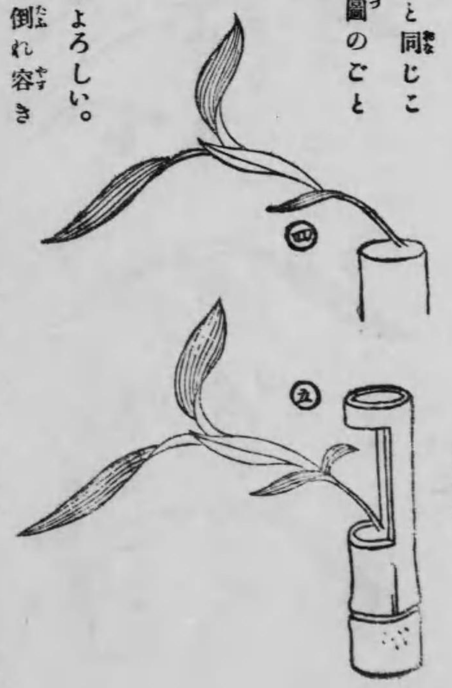
横鱗の花も、三才の花矩を竪にしたると、横にしたるとの相違があるばかり

第五十五圖（一）



で、入れ方の順序は竪鱗の花と同じことであります。即ち第五十五圖のごとく先づ用を入れて用添を入れ、次に体を入れて止を入れ、夫より後止を入れるので、或は後止を入れず体受を入れてもよろしい。

第五十五圖(二)



横鱗は用の葉に重力が掛つて倒れ容き故に、根本を少し矯めて挿すのであります。用の格先は水際と水平になし、体の格先は用の格先と根元の中間に備へるので、止は用添の下へ斜に前に出し、格先は少し下げるのであります。

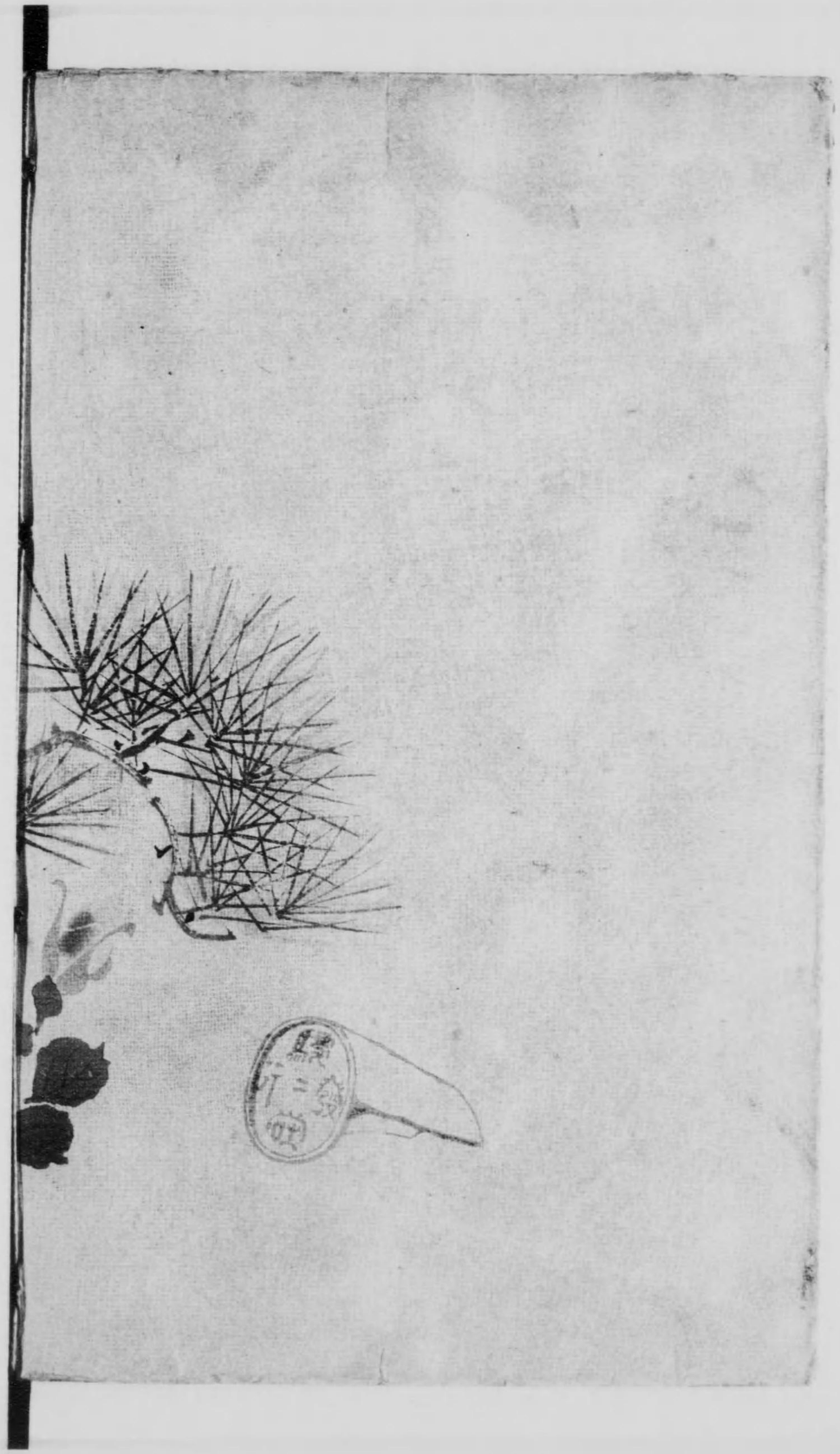
用流し(第五十五圖)は第一に流しの葉を入れるので、以後の手順は前同樣であります。而して流しの入れ方は竪鱗の花に準じてよろしい。

第五十六圖

(五) 櫻

櫻とは裂くるで、樹皮の裂ける故とも云ひ、又木花開耶姫の名より轉じたる横鱗變化の曲入れ方は前とは反對になるので、第五十七圖に示すごとく葉を拵らへ、先づ体添㊀を入れて次に体㊁を入れ、次に用㊂を入れて用添㊃を入れ、止は矢張り一番後にて挿すのであります。これは矯め方が違ふので、用は成るべく眞直なる葉を撰み、水平に備へるので、止は從前通りであります。

11
3
489

第五十七圖

終